社会に隠された優生思想

相模原殺傷きょう判決

辺見庸さんに聞く

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が16日、元職員の植松聖（さとし）被告に判決を言い渡す。検察側の求刑は死刑。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さんに聞いた。

（21面参照）

へんみ・よう　1944年宮城県生まれ。共同通信社で北京特派員、ハノイ支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起床装置」で芥川賞、「もの食う人びと」で講談社ノンフィクション賞、「眼（め）の海」で高見順賞、「増補版1★9★3★7」で城山三郎賞。他に「赤い橋の下のぬるい水」「青い花」「純粋な幸福」など著書多数。

「命の選別」　死刑は被告と同じ論理

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の上で、非常に大きな出来事だと直感しました。「人間は平等であり、人権は守られる」「人を差別しても、されてもいけない」といった言わずもがなの前提が私たちの内面でとっくに破綻していたことを、あらわにしたからです。

「存在してもいい人間」と「存在してはいけない人間」を選別する―。植松被告、私は「さとくん」と呼びますが、彼はそういう論理で重度障害者たちを殺していったとされている。裁判所がもし、死刑判決を下すとしたら、その瞬間に司法は「さとくん」と同じ論理に立っていることを、最も単純な形で証明することになる。

私は「月」という作品で「世の中をよくしなければならない」と考える「園」の職員「さとくん」と、目が見えず歩行ができず、しかし自由に「おもう」ことができる入所者「きーちゃん」という人物をつくりました。きーちゃんは痛みの中で「なぜ、在るのか」と考え続けます。私たちが「存在してしまう」ことは、主体的にあるのではなく「気付いたらそうだった」という偶然によるものです。

▽実存

意志とは関係なく「在ってしまう」という実存について、私たちはとりあえず「そういうものなのだ」と引き受けるしかない。他人が「在る」「ない」を決めることはできません。けれど日本社会では長く強制不妊が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしている。「選別」の射程を広げれば、企業では人事評価で「良い社員」かそうでないかをより分けている。強い者と弱い者、美しい者と醜い者、「正気」な者とそうでない者…。あらゆる場所に優生思想が染みわたっている。

殺傷事件が起きた知的障害者施設「津久井やまゆり園」（2016年、相模原市緑区）

ところが日本社会は、重度障害者に優しいかのような偽装をしています。たまにテレビに登場させれば「ハートウォーミング」な文脈に回収してしまう。重度の障害がある人、その保護者が抱える重さはとてつもないもので、それに見合うリアリティーが番組には全く欠けています。

本当は自分の周囲から排除している人、見ないようにしている人々、忘れようとしている人たちを、「共生」「絆」などと軽々しく肯定する言葉だけはたくさんあります。それはおためごかしというものです。

▽本音

都合の良いものだけに囲まれて生きていたい、「存在」を意識から消したい―えたいの知れないそんな「本音」が、底知れない悪意の沼のように横たわる日本社会の基底に、相模原の事件は太いくいを打ち込むような出来事でした。なぜなら、この時代と社会に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したからです。その意味で「さとくん」は「社会的産物」であり、事件は「一人格の問題」ではない。彼をエキセントリックで例外的な人間だというふうに扱えば扱うほど、事件の真相からは離れていく。

「さとくん」は施設で働いている時、障害者を取り巻く暗い風景に傷ついたのではないか。それを自分で対象化し、消化することができなくなったのではないか。すさまじい暴力を発動させた背後には、社会が抱える優生思想があった。彼個人の属性によるものではなく、その暴力は社会にぴたりと同調していた。

「さとくん」は、暴力に突き進んだ時の論理を、「そうではないのかもしれない」と保留することができなかった。何かを保留すること、抑制するには骨組みのしっかりした知性が必要です。それは「世間」や「社会」に同調せずに「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における峻厳（しゅんげん）さが問われることです。

死刑制度には、問われる罪に関わりなく、無条件で反対です。国家による殺人という意味では戦争と同じであり、それを容認することになる。死刑は「暴力を内包した国家」を成り立たせているものなのです。

「月」の表紙

ズーム

「月」　寓意（ぐうい）に満ちた叙事詩としても読むことができる長編小説。2018年に出版。物語は「園」に入所する「きーちゃん」の独白を基調に進む。全く動けず、目が見えず、思うように話せないきーちゃんは、自分を見た者が「ありきたりの〈善意〉」から発する「おさだまりの文言〈オキノドクニ…〉」や「あからさまな嘆息」で自身の姿を想像する。

「在りつづける」ことを誰かに請われているわけでもなく、誰にも分かってもらえない痛みを抱えながら「在る」ことを考え続けるきーちゃんは「だれよりもそっちょく」な職員「さとくん」に心を許している。だがさとくんはある日「〈敵対者〉の空気」をまとってやって来る。

学芸

感想をお寄せください。〒780-8572高知市本町3の2の15、高知新聞社学芸部。メールはgakugei@kochinews.co.jp

エネルギーの大革命か―■核融合発電

2011年の東京電力福島第1原発事故の後、注目を集めた風力や太陽光などの再生可能エネルギーがコストの高さなどからそれほど浸透しなかった季節だ。3月の声を聞けば、この冬もどうにか乗り切った、寿命が一つ

水素の同位体の重水素と三重水素を燃料として核融合をおこし、大きなエネルギーが発生する。

原子核と電子がバラバラに供給を止めれば停止する。このが原発よりも安全とされる理由だ。また原発のような高レベルの放射性廃棄物を出すこともない。燃料の重水素と三重水素は、海水や炉内から得られるという。

ただ核融合で生成された中

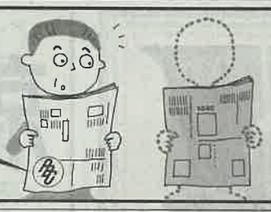
春、3月。心浮き立つ季節。草木は萌え、人は希望に胸膨らませる。

無論、年寄りにも待ち遠しかった季節だ。3月の声を聞けば、この冬もどうにか乗り切った、寿命が一つ

ンバツから〟の高校野球も中止に決まった。

各種イベントも中止になり、学校から子供の声が消えた。これではお花見に浮かれるのもはばかられるだろう。

当紙の部数はABCが確認しています。



数字です。

合理的なマーケティング・広告活動には、正確な部数の確認が欠かせません。
ABCは、第三者機関として新聞・雑誌の部数を公査し、発表しています。
一般社団法人 日本ABC協会　新聞雑誌部数公査機構 Japan Audit Bureau of Circulations
http://www.jabc.or.jp

掲載されたあの写真や出来事をいつまでも手元に残したい
高知新聞 記事・写真サービス

仏式葬祭メモ
焼香の仕
仏事の焼香は、そ
るとともに仏の供
香炉の右に入って
中指の三本でつま
瞬止め、目を閉じて
くべます。くべ方は
がなの「の」の字を
とします。これを
掌します。線香は
くの火にかざしま
替え、右手であお
り、線香を振って消